

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01155

研究課題名（和文）ハワイにおける日本人の「居住空間」とジェンダー～国際移動の視点から～

研究課題名（英文）Gender and The Community Space built by Japanese in Hawaii

研究代表者

影山 穂波（Kageyama, Honami）

椋山女学園大学・情報社会学部・教授

研究者番号：00302993

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ハワイにおける日系人と戦後移住の新一世と呼ばれる日本人の「居住空間」を国際移動とジェンダーの視点から明らかにすることである。戦後GHQの軍人・軍属と結婚した「戦争花嫁」への調査からは、困難に直面しながらも前向きに生活を営んできたことが明らかとなった。新一世の女性たちが中心となったネットワーク活動の中には日本の桜を植樹する活動も進められていた。これは心のよりどころとして日本の桜を位置づけるものであった。

また帰米二世を中心に収監された日系人収容所についても注目した。忘れてはならない戦争の記憶である。居住空間は、日常の生活を通して認識され、形成にかかわっていたといえよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義はハワイの日本の「居住空間」をジェンダー視点から可視化することにある。「戦争花嫁」や国際結婚など、第二次世界大戦後に移住した日本人を研究対象とすることは、多様なスケールにおけるジェンダー化の様態を可視化する可能性を持っている。

また「居住空間」の概念でジェンダーの視点からネットワーク調査、ライフヒストリー調査を用いて都市空間を検討することにも意義がある。また、日系人収容所の調査をはじめ、戦時中から接続する状況に関して調査をはじめたことで、戦争の記憶を継承する意義についても言及することが出来た。同時に国際移動がもたらす居住空間のありかたを検討していくことが出来るだろう。

研究成果の概要（英文）：In this study I focus on clarifying how Japanese living in Hawaii built their community space from the view of international migration and gender. One result that became noticeable involved “War Brides” who were married with soldiers and other military-related personnel stationed in Japan. The results of interviews indicated clearly that despite many difficulties, these women have been living positive, fulfilling lives. Another of the interview aspect involved one of the Japanese womens' networks which promoted cherry blossom tree planting - the flower which signifies the heart of Japanese people. Having Participated in these activities contributed to the building of their community space. I also focus on the internment camp in Hawaii. It's the memories of war and the legacy of Japanese history in Hawaii

研究分野：人文地理

キーワード：ジェンダー 居住区間 国際移動 新一世 ハワイ 戦争の記憶

1. 研究開始当初の背景

近代以降、日本の都市空間は、機能的に分化され、ジェンダー関係を投影しながら生産されてきた(吉田・影山 2024, 吉田 2007, 影山 2004)。こうしたジェンダー構造が国際移動により移住した人々にどのように影響を与えているかという問題関心のもと、ホノルルにおける調査を実施した(影山 2014, 2010a, 2010b)。日本出身の女性たちは、移住した時期、社会階層により多様に存在し、それぞれの特徴を持つ空間がハワイにおいて形成されてきた。資本と労働の移動に基づきグローバルなスケールで日本人の移住を検討すると、そのジェンダー構造が経済構造の変化に影響を受けながらホノルルの空間構造に組み込まれていくことが分かる。影山(2014, 2010b)では、戦後移住した日本人女性が築いているネットワークに参加し、その活動が空間形成に及ぼす影響を検討した。また戦後最初にハワイに移住したのは GHQ の軍人・軍属と結婚した「戦争花嫁」にも注目した。「戦争花嫁」であった。当時の雑誌記事などには、多様なまなざしが表出されているが、ライフヒストリー調査からは、多くの困難に直面しながらも前向きに生活を営んできた姿が明らかとなった。

これらの研究に基づき、本研究では、戦後移住の日本人を移住の形態とジェンダーに注目し、そのネットワークとライフヒストリーから「居住空間」を探ることとした。ハワイにおける Japanese 研究では、日系人研究と戦後日本人研究が別物のように扱われてきた。しかし、多くの日系人と国際結婚をしている女性たちの動向を見ていくと、日系人と戦後日本人の連続・非連続について同時に検討することに意義がある。日系人・日本人の「居住空間」への注目は、地域の課題を考察する機会を提示するとともに、日常生活の充実のための活動の展開によりローカルな空間の創造につながる。ハワイにおける「居住空間」とそこに作用する資本と政治の力による動向を留意し、権力作用としてのジェンダー関係に注目することで、都市空間とジェンダー(影山 2004)の関係は明らかになる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」を、国際移動とジェンダーの視点から明らかにすることである。戦後に移住した「新一世」日本人は、日系人の多いハワイ社会において、少なからぬ影響を与えてきた。そして日本企業の投資、国際結婚、ハワイでの起業・就業などを通して、「居住空間」を形成してきた。その過程を、ハワイを移住先に選択した日本人の動向から検討する。また、戦後のハワイを形成してきた主体である日系人との連続・非連続についても言及していく。移民研究において日系人と戦後移住の日本人の間には分断が見られ、申請者自身の前年までの科研テーマにおいても、戦後移住の日本人の調査において日系人との連続性への視点は欠落している。この連続面に留意することでハワイにおける日本人の「居住空間」を検討するものである。

3. 研究の方法

本研究を遂行するにあたり、以下の4つの調査を進めた。(1)戦後移住した「戦争花嫁」、国際結婚した女性、ハワイで起業したり就業したりしている女性、という3主体の女性たちのライフヒストリーの聞き取り調査である。(2)影山(2014, 2010ab)を発展させるために、彼女たちが現地で形成するネットワークへの聞き取り調査を進めた。近年の動向として、日本とハワイをつなぎながら、ハワイで活動が展開されているネットワークが見られるようになった。例えばハワイシニア協会、ハワイサクラ基金などの活動である。そこで本調査ではハワイサクラ基金の動向について調査を実施した。(3)日系人と戦後移住の日本人につながる課題として太平洋戦争の影響について検討した。特にオアフ島に開設されたサンドアイランドとホノウリウリの収容所について注目した。以上の研究より戦後の日本人女性たちを中心としたネットワークを通して築いてきた「居住空間」とジェンダーとのつながりについて、また戦時中の日系人収容所が与えた影響について検討した。

4. 研究成果

(1) 戦後の日本人女性のハワイへの移住

本研究では、ハワイにおける戦後移住の日本人の「居住空間」という視点から多様な動向に注目してきたが、注目すべき存在の一つは「戦争花嫁」と位置付けられてきた女性たちである。彼女たちは、第二次世界大戦後日本を占領した GHQ の駐留軍人や軍属(G.I.)たちと結婚した人たちである。駐留兵の大半をアメリカ軍が占めたこと、ハワイをはじめ、多くの日系二世が駐留していたこととも関連して、4万人以上の女性たちが「戦争花嫁」としてハワイを含むアメリカへわたっていった。結婚の経緯も多様であるし、その後の人生も様々である。現在90歳代を迎えた彼女たちからの聞き取り調査は重要な課題となっている。前回の研究から継続して詳細なラ

イフヒストリー調査を実施した。いずれも困難に直面した時代を記憶にとどめながらも前向きな人生を送っていた。義理の家族や周辺コミュニティとの関係、就業について、子育てについて、退職してからの生活、現在の動向と、ライフステージに応じて課題を乗り越えており、時代や環境に翻弄されながらも自立した精神を持ち続けていた。

(2) ハワイサクラ基金と日本人アイデンティティ

日本からワシントンに桜が植樹された1912年から100年後の2012年「桜寄贈100周年事業」日米交流として、ワシントンからアメリカ各50州に桜を植えるプロジェクトが行われた。この動向に呼応して、日本からハワイに桜を送るプロジェクトが開始し2012年2月、ハワイ島ワイメアの桜祭りでは、5本の桜が植樹された。これを契機に2012年、桜の苗木を植樹して桜並木を作ろうという桜並木委員会が結成された。熱帯域に位置するハワイの中でも、ハワイ島には標高が高く寒冷な地域もあるが、オアフ島で桜を植樹できる場所を探すことは困難であった。しかしメンバーが尽力し、2016年オアフ島ワヒアワに位置するヘレマノ・プランテーションに2016年2月にセンダイヤ桜12本が植樹されることとなった。さらに2016年11月には、アメリカ太平洋艦隊の中核基地であるキャンプ・スミスにも桜が植樹された。すでにハワイへ高知からハワイに送られていた苗は少しずつ植樹されたものの、受け入れ先を探すことは困難な作業であった。また、必ずしもハワイの気候が植樹に適さないため、桜を維持するための桜守を定期的に招へいする活動も続けた。ハワイサクラ基金のメンバーを中心に植樹を進めた結果、2024年に植樹を完了し、基金としての活動はひとつの節目を迎えたところである。

植樹運動の中心となっている女性Sさんにとって桜の植樹は大きな意味を持つ。彼女が時々世話をしている日本人高齢者の中には「戦争花嫁」としてハワイにわたってきた人が少なくない。「戦争花嫁」の中には日本に毎年のように遊びに行く人もいるが、中には、日本にいた親類との関係を断絶してしまった人もいる。そんな日本人の女性たちに色の濃い沖縄桜ではなく、薄墨の日本桜を見せてあげたいというのが彼女の願いである。

ハワイサクラ基金はハワイにある桜を存続させるための会へと変化しながら、ネットワークを拡大している。桜は「そこにあるべきものと考えてきた日本人にとってかけがえのないものである」というハワイサクラ基金のメンバーの語りは、海外に生活をする日本人の心のよりどころを生み出している意義を示すものといえよう。ハワイでの桜の植樹に際して高知県立牧野植物園からの助力があったことから、2024年2月にはホノルルのフォスター植物園と牧野植物園はフレンドシップを結び、公的なネットワークも形成された。一方で、2012年にハワイに持ち込んだ苗木が2024年に植樹され、この活動は一つの区切りを迎えている。「桜」という形あるものが日本人の精神的支柱としての役割を果たすだけでなく、広く地域を結び、ハワイにおけるふるさとづくりへとつながっているのである。

(3) 戦争の記憶：日系人収容所

ハワイの日系社会の歴史を検討する際に、忘れてはならない事件の一つが1941年に生じた真珠湾攻撃である。日系人の人権、その後の権力の転換を促す契機になった事件ともいえる。日系一世には、母国と移住国との闘いを意味している。未成年の日系二世は、アメリカ生まれでアメリカ国籍を取得しており、ルーツであるために日本国籍も持つ二重国籍者であることが多かった。一世の中には、子どもの教育は日本で受けさせたいと考え、日本で教育を受けたのちにハワイに帰国するものも多くいた。彼らのことを帰米二世と呼ぶ。こうした多様な日本人/日系人がそれぞれに真珠湾攻撃により、適正外国人として過酷な状況に直面することとなる。

その一面が日系人部隊である第422連隊と第100大隊にみられる。太平洋戦争中、米軍は“Remember Pearl Harbor”を合言葉に対日戦を展開するが、とくに日系人部隊はこの言葉のもとに集められることとなった。自らのルーツであり、親の母国である国と敵対するが故に、アメリカへの忠誠心をことさらに示す必要を求められ、多くの日系二世がアメリカ兵として戦地に赴き、命を落とすこととなった。“Remember Pearl Harbor”とともに掲げられた合言葉が“Go For Broke”すなわち「当たって砕けろ」である。多くの犠牲を出しながらも、ヨーロッパ戦線で功績を挙げ、現在なおアメリカで最も多くの勲章を受けた部隊として知られている。

もう一方で直面したのが日系人の強制収容であった。アメリカ本土においては、ほぼすべての日系人が収容され、その数は12万人に及ぶという。第二次世界大戦中、敵国であったドイツやイタリアからの移民は収容せず、日本からの移民のみを収容したことに対し、ようやく1988年に当時のレーガン大統領により「市民の自由法」に基づき賠償されることとなった。1970年代から展開された保障のための運動は、アメリカ本土における日系人の地位向上とともに語られ、多くの人々の認識するところとして改めて注目を集めることとなった。

こうした状況と比して、実際に真珠湾攻撃を受けたハワイにおいては逮捕されたのはコミュニティリーダー、神道の神官、仏教の僧侶、領事館の職員、日本語学校の教員、日本語新聞社の人などが収監された。帰米二世が多かったことも特徴である。オアフ島に開設されたホノウリウリでは、350人以上の日系人収容者の中で女性は7人ほどであったと言われる。収容者が一部であったこともあり、戦後長期にわたりハワイにおける収容所は語られずに来た。2000年代に入ってからの本格的な発掘ののち2015年にナショナルパークに認定されているが、私有地に立地していることもあり、現在なお立ち入りは制限されている。しかしこれは忘れてはならない戦争

の記憶であり、日系人にとっての重要なモニュメントとも言えよう。

(4) 日系人・日本人の「居住空間」

1924年のハワイにおける日本人の移住禁止から1947年の一部の戦争花嫁に限定しての入国許可の時代まで、新たな移住者をもたないハワイは日系一世・二世を中心に社会が構成された。戦争の中で、「日本人」として差別的なまなざしを受けながらも「アメリカ人」として身体を張って生きることが求められた。そして、疑わしき存在は収容され、レットルを張られたうえで監視されることとなった。その日系人収容所の記憶は当事者が語らないことで忘れられてきたものの、2000年ごろに再発見されてからはその意義が問われている。

また日本の薄墨桜の植樹からは、移住してきた日本人、また日系人の心のよりどころと位置付けられた桜の場所をめぐる関係性が構築されてきていた。それぞれの状況において居住空間は、日常生活を通して認識され、形成されていたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 影山穂波	4. 巻 55
2. 論文標題 インド・チェンナイにおける海外在留邦人の居住空間	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集	6. 最初と最後の頁 75 - 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 影山穂波
2. 発表標題 地理学におけるジェンダー視点の課題と展望
3. 学会等名 日本地理学会秋季大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本地理学会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 818
3. 書名 地理学辞典	

1. 著者名 漆原 和子、藤塚 吉浩、松山 洋、大西 宏治編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 図説 世界の地域問題 100	

1. 著者名 吉田容子、影山穂波編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 163
3. 書名 ジェンダーの視点でよむ都市空間	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------